

心の豊かさを求めて 看とりの中の俳句 ～訪問看護の事例から～

開催日 平成 15 年 9 月 20 日

講 師 本学講師 向 山 文 子

訪問看護は、病気や障害を持ちながら在宅で療養している人とその家族を訪問し、病状の観察をはじめ身体の清潔などその他、家族の介護指導や精神的支援などを行い、住み慣れた場所でその人らしい生活が送れるように援助することです。

対象の多くは人生の先輩です。医学的なことは少し話せても、先輩に示せるようなことは、何ひとつありません。かりに言葉で表現することが出来なくても、仕草や目の動きだけでもその人の思いがわかる配慮がなければ、生活を整えるようなサポートは出来ないし、何も見えては来ないと思います。そこでは十人十色、百人百様の看護が求められるからです。

定められた方針のもとでなされる施設看護とは違い、在宅では1対1でのかわりのため、看護技術と人間性の評価は直接、看護職自身にはね返って来るのは当然ですが、病院で使用している看護用品を求めたのではなく、経済性を考え家庭にあるもので介護用具を工夫し、応用するときには看護の創造性を発揮する喜びがあります。

私は看護職として患者や家族との出会いの中で感じる人生の重みや歴史を俳句に詠むことにより、自分への反省と生きる証にしています。これらの作品を紹介しながら、生きることを感じていただければと思います。

- ・ 訪問看護俳句抄
- ・ 紹介事例（4例）

花嫁衣装（事例1）

朝日に鶴が群れ舞う黒地の裾模様。裏地は紅絹の振り袖。いつ伺ってもSさんはそれをハンガーに掛けて眺めていた。「わたしが縫ったんよ。これを着て嫁入りしてきたんよ看護婦さんに見てもらおうとおもうてな」「きれいやね」「ありがと」「すてきやねえ」訪問のたびにくり返すSさんとの会話でした。

ある日、新しく注文が加わりました。「あいな、お迎えが来たら、これ着せてほしいねん」「ええ、分かりましたよ」そう答えると、Sさんは嬉しそうに微笑みました。細い目が隠れるような、笑顔を見てわたしは一緒に肩をすぼめて笑いました。この日、十分に眺めつくしたという得心からか、お迎えの時に着る約束が整った安心からでしょうか、ホコリがするからタンスに納めるということになって、私もそれを手伝いました。

その後、小康を保つかに見えていたSさんでしたが、立秋過ぎの深夜、十八歳の日と同じ長い袂を抱いておだやかに旅立ったのです。Sさん享年九十三歳。

息詰めて死者の紅引く 星月夜